

令和 7 年度 鹿児島女子短期大学
国語 入学試験問題

受験番号

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(20点)

障害者の鑑賞サポート 共に楽しむ機会広げたい

(※問題作成のため一部改変)

視覚や聴覚など身体に障害がある人たちが映画や演劇を劇場で楽しめるよう、鑑賞をサポートするサービスが広がりつつある。

障害者差別解消法の改正で、今年4月から民間事業者にも障害者のバリアーを取り除く「合理的配慮の^(エ) ティキョウ」が義務化され、取り組みが進んだ。

たとえば、目の不自由な観客に、事前に舞台の配置を説明したり、上演・上映中に場面や俳優の動き、表情を音声ガイドで解説したりすることで理解を助ける。

聴覚障害がある人には、字幕を表示するタブレットを貸し出す。舞台上での手話通訳や、補聴器などに音を伝える特別な^(イ) キキを導入する劇場もある。

日本劇団協議会が今年5月、加盟団体に調査したところ、回答した45団体のうち7割以上が鑑賞サポートを^(ウ) ジッシしていた。

とはいえ、民間の事業者にとって負担は小さくない。「できる限りのことはしたいが予算的に厳しい」「助成金がないとサポートが最低限になる」といった声が寄せられた。

東京都などは今年、鑑賞サポートへの助成制度を^(エ) ソウセツした。映画や演劇だけでなく、美術、茶道、華道など幅広い分野が対象だ。サービスの広がり期待したい。

障害者スポーツの祭典、パリ・パラリンピックは連日熱戦が繰り広げられている。来年は耳の不自由なアスリートのためのデフリンピックが東京で^(オ) カイサイされる。

共生社会の実現は、文化芸術分野だけでなく、スポーツにとっても大きな課題だ。競技場にながらスマートフォンで^(カ) ジッキョウが聴けるなど、障害者が観戦を楽しめる取り組みに力を入れるべきだ。

サポートを必要としているのは障害者だけではない。小さな子どもがいる人たちのための託児サービスの整備や、外国人に向けた多言語対応なども求められる。事業者間のノウハウの共有や人材育成も重要だ。

デジタル時代になり、オンラインによる鑑賞や観戦も可能になった。ただ、大勢の観客と一体となるリアルな経験は、何物にも代えがたい。

誰もが I や II に親しめる環境の整備は、より豊かな社会の実現につながるはずだ。

(毎日新聞・社説 2024年9月7日(土)より)

問一 傍線部(ア)～(カ)のカタカナを漢字で記しなさい。

問二 空欄 I ・ II

のそれぞれに入る適当な語を本文中より抜き出しなさい。

(その二)へ続く

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(40点)

(※問題作成のため一部改変)

「間違えること」は **ア** への通過点

算数が苦手だという理由は、人それぞれあることでしょう。しかし、子どもに「どうして算数が好きじゃないって言うの?」と聞いてみると、次のような返答が多いことを実感します。

「だって、どうせ間違えるから」

問題が解けないために、学習から自分自身を遠ざけていることがわかります。でも、こうした発言を聞くと「問題が解けないこと」も原因ですが、何より「間違えること」が嫌なのだと思えることもできます。

大人であっても「できない自分」を認めたくないという理由で、むずかしいことから逃げたいときもあるでしょう。子どもも同じです。しかし、その根本にあるのは「間違える」ということばの意味と価値の問題だと私は考えています。

「なぜこんな簡単な問題もできないの!」

「あなたには才能がないのよ!」

「1年生でも解けるでしょ!」

日常生活でこのようなことばを浴びせられた子どもは、失敗することを極端に恐れるようになります。ミスをした瞬間に自分を否定することばが飛んでくるのであれば、無理ありません。

こうして子どもは **A** 「間違える」ということばの意味を「してはいけないこと」と学習していくのです。基本的に答えが一つにしばらくられる算数の問題は、どうしても間違えやすいですよね。

中・高生の皆さんはどうでしょうか。いつからか「勉強がきらいになった」という人もいますよね。冷静に考えてみると、いつも間違えることを恐れている自分がいませんか。

I 、子どもは間違えなければいけない存在です。 **II** 、子どもの成長過程を思い描いたときに、失敗は必ずその先にある成功体験へとつながっているからです。

III 、鉄棒が苦手で、どうしてもさか上がりができない子がいたとします。そんな子が学校の休み時間に友達に教えてもらったり、放課後の公園で一人練習をしたりしながら、ようやくできるようになったとしましょう。

その子にとって、これまで「できなかった自分」は認めたくない存在でした。でも、「できるようになった自分」になれば、「できなかった自分」は決してマイナスな存在ではなく、努力をするきっかけとなった存在として映るでしょう。

IV 、過去の自分を新たに意味づけることができます。だから、成長への通過点として「間違い」が必要なのです。

今まで「できない」という思いを抱いていたからこそ「できた」という喜びが生まれます。はじめから迷うことなくすべてできるということは、反対に「できた」、「成長した」という実感を抱くことがないままに大人になることを意味します。

V

、失敗経験の少

子どもが間違えるということは、新しい何かに向き合っている証拠でもあります。人は動かなければ、新しい何かを得ることはできません。失敗をくり返ししている人は、失敗するのが当たり前だから、挑戦することに躊躇がないのです。

このように考えると、間違えや失敗は「しなければいけないこと」であると納得できるかと思います。むしろ、率先して間違えるように子どもの頃から教えなければいけません。

(E) その後の人生への向き合い方にも関わってきます。

だから、算数で解けなかった問題があったとしても「ここまでではできた」という部分を認め、自信をつけてあげることが大切です。「できるようになっている」という実感が、次へ進もうとする原動力にもなるからです。間違いを通じて「できた」という喜びを得ることは、子どもの成長にとって欠かせないのです。

〔岸圭介(2024)『学力は「ごめんなさい」にあらわれる』ちくまプリマー新書より〕

問一 空欄 ア に入る適当な語(漢字二字)を本文中より抜き出さない。

問二 傍線部(A)「間違える」ということばの意味を「してはいけない」と学習していく」とあるが、その原因をわかりやすく説明しなさい。

問三 空欄 I V のそれぞれに入る適当な語を次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア むしろ イ 例えば ウ なぜなら エ つまり オ でも

問四 傍線部(B)「その後の人生の向き合い方にも関わってきます」とあるが、どのような人生への向き合い方になるか。本文を踏まえて、あなたの考えを説明しなさい。

三 次の文章は、横光利一の「機械」の最後と最初の一文を紹介し、その作品の解釈

を述べた文章である。それを読んで、あとの問いに答えなさい。(40点)

(※問題作成のため一部改変)

最後

私はもう私が分らなくなって来た。私はただ近づいて来る機械の鋭い先尖がじりじり私を狙っているのを感じるだけだ。誰かもう私に代って私を審さばいてくれ。

私が何をしに来たのかそんなことを私に聞いたって私の知っていようはずがないのだから。

最初

初めの間私は私の家の主人が狂人ではないのかときどき思った。

なぜこんな文体なのか？

この作品を、今の目で読んでみると、とくに奇異な感じはしないのではないのでしょうか。むしろ純文学系の一種のスタンダードな文章のようにも思われます。しかし、これが発表された一九三〇年には、モダニズムによる実験作として大きな反響を呼んだのでした。

当時、横光は **あ** などとともに「新感覚派」の作家として脚光を浴びていました。新感覚派とは、従来の自然主義文学や当時のプロレタリア文学に対抗し、感覚の斬新さをモットーとした文学一派のことです。 **Ⅰ**、それとはつきり分かる表現上の特徴が認められます。

Ⅱ、この「機械」という作品は文庫本で四十ページ弱ありますが、段落は六つしかありません。平均すれば、一段落が六〜七ページと、きわめて長いものになっています。

また、句読点についても、句点「。」は二四一箇所が付されているのに対して、読点「、」は二二五箇所にしかりません。読点が句点より少ないということは、通常はありえませんが。全体で五五七行、一文平均は二行以上ですが、一文に一個も読点が用いられないこともあるわけです。

さらに、全二四一文中、文頭に接続詞があるのが九十文ありますが、そのうちの半数近くが、「しかし」「だが」などの逆接系の接続詞であるというのも、目立っている点です。

これらはもちろん、表記・表現上のみの特徴というわけではありません。それに見合う内容があつてこそ、斬新かつ独自の文体になりえていると言えます。

舞台は、町場の小さなプレート製作所。しかし作品名の「機械」は、そこにある機械を指してはいません。「機械」はテキストの中に、最後の部分を含めて四回、どれも **ア** として出てきます。

最初は、プレートの新たな発色法の化学実験に関する、「いかなる小さなことにも機械のような法則が係数となつて実体を計っている」。次は、同僚との関係に関する「私たちの間には一切が明瞭に分かっているかのごとき見えざる機械が絶えず私たちを計っている」。そして、工場の社長のミスに関する、「一つの欠陥がこれも確実な機械のように働いていた」。最後が末尾の「私はただ近づいて来る機械の鋭い先尖がじりじり私を狙っているのを感じるだけだ」となります。

これらの「機械」に共通しているのは、人間の意思とは関係なく存在し、 **甲** というイメージです。語り手の「私」は次第にそのような力を自覚するようになり、やがて圧倒されて、最後は狂気を帯びるまでになってしまいます。

語りと文体

最初の一文における「私」は、この一文だけだと、妻のことではないかと思えます。が、その後すぐに「細君」が出てくるので、違うのが分かります。それでも、まだ「私」の正体は不明で、二頁めの終わりまで来て、やっと工場の従業員であることが示されます。

このような設定・関係の分かりにくい始まり方は、この作品が徹底して「私」の視点でしか語られていないことによります。誰に対してであれ、何事に対してであれ、「私」自身の中での(A)相対化はしつこいほどにさまざま行われますが、ついに他者の視点は見られず、真の意味での相対化はまったくありません。

一般に、言語コミュニケーションでは、当事者は、各発話に対する意味計算を行います。自分がこう言えば相手はこう思うのではないかというものです。「〴〵と相手が思うのではないか」という推測は「〴〵と相手が思うのではないか、と相手が思うのではないか、と……」のように、無限に繰り返されるもので、そうすると、正常なコミュニケーションが成り立たなくなってしまう。

この作品における「私」が陥ったのは、まさにそれでした。先に示した、①、②、③ というのも、すべてそれにつながっています。

そもそも、「私」については「九州の造船所から出て来た」とあるだけで、なぜ造船所を辞めたのか、なぜ東京に出て来たのか、の説明はありません。ただ自分を「全く使い道のない人間」と語るばかりです。どのみち自分だけを相手にする語りですから、いちいちの説明は不要なのでした。

作品最後の直前は、「私」と、同僚の「軽部」と、臨時の助っ人の「屋敷」の三人が、仕事場で一緒に酒を呑み明かした翌朝、屋敷が死んでいたという場面です。

「私」はその死因を、毒性の溶液と考えますが、その根拠も示さないまま、いきなり「私」と軽部のどちらがそれを飲ませて殺したのかを巡って、悶々とします。あげくに、「いや、もう私の頭もいつの間にか主人の頭のように早や塩化鉄に侵されてしまっているのではなからうか。」と、冒頭部分の「イ」とリンクさせて、破綻を予感させる最後となっています。

〔半沢幹一(2019)『最後の一文』笠間書院より〕

問一 空欄 あ に入る「雪国」や「伊豆の踊子」などを書いた作家の名前を答えなさい。

問二 空欄 Ⅰ、Ⅱ それぞれに入る適当な語を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア ところで イ 例えば ウ つまり エ たしかに

問三 空欄

ア

に入る適切な表現技法を答えなさい。

問四 空欄

甲

に入る適切な文を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 様々な困難を構わず突き進む推進力
- イ 些細な綻びによって停止するもろさ
- ウ 物事を規則的に左右する圧倒的な力
- エ 個々の差異に気づけるほどの冷静さ

問五 傍線部

(A)「相対化」の対義語を答えなさい。

問六 空欄

①

③

で取り上げられている「機械」の表現上の特徴について、本文

の内容を踏まえて答えなさい。

問七 空欄

イ

に入る適切な語を本文中より抜き出しなさい。